観点・小問ごとの分析	対策の視点
1.は文章の論旨の展開が的確にとらえられていないことと、それぞれの接続語の用法が十分理解されていないためか、正答率が低い。(1)は41%、(2)は32%、(3)は28%である。 2.は正答率が58%である。文中から答えを書き抜いて解答するため、書き過ぎたり、書き足らなかったりして、誤答となったものが多い。 3.これも指示語の問題である。ウと答えた誤答が多い。「そのころ」のすぐ直前の段落に「そのころの人々の生活を大きく変えた。」とあるので、それに惑わされたのであろう。 正答率53%。	多くなるが、その際、文と文との意味のつながりを考えながら、指示語や接続語を的確に使うことは、非常に大切な技能である。 ◦ 指示語や接続語の指導に当たっては、文の意味や文章全体の意味内容・文脈に適合するように、これらの効果的な使い方を指導することが必要である。 ◦ 文脈の通った文章を書くためには、文章ををつづる前にあらかじめ文章構成図を書かせることも効果的である。
二、言葉を続けて文をつくる (1)は、正答率85%とよくできている。 (2)の誤答は、イとしたものが多い。順接か逆接か迷ったことが原因である。正答率73%。 (3)は正答率33%と非常に低い。絵はがきの陽明門か、日光の陽明門かはっきりつかめていないためであろう。	◦ 文章完成問題である。このような問題は、文章全体が、何について、どのように述べようとしているかの見通しを持ってかかることが大切である。指示語や接続語の働きを的確に理解させることも大切である。 ◦ 「こ・そ・あ・ど」の意味・用法をしっかり身につけさせることが大切である。
三、敬体と常体を使い分けて書く 1.「…でした。」で終わる敬体文を常体文に直す問題である。「であった」「過ぎだ」「である」「過ぎです」などの誤答が多い。 正答率52%である。 2「…ならない。」で終る常体文を敬体文に直す問題である。「ならないのです。」「ならないのだ。」「出なくてはいけません。」などという誤答がみられる。正答率は50%である。	◦ 無答があるところをみると、敬体・常体という用語そのものの理解が不完全であるように思われる。 ◦ 児童は、作文を書く場合、低学年から書き慣れた敬体で書きがちであるが、高学年になるにつれて、常体の文にも慣れさせていく必要があろう。
四、文を続けて文章をつくる 誤答のほとんどが、最後の二つの文の入れ	◦ このような完成問題では、文章全体の文意をいちはやく洞察して取りかかる必要がある。